

資料紹介

永田権平翁民功碑

藤田 理子

はじめに

国分二丁目の水城東門跡から福岡方面に向かって、通称「往還」と呼ばれる旧街道を行くと、九州自動車道と福岡南バイパスが並走する下をくぐって少し先の右手に、高さ約五メートルの碑を仰ぎ見ることができる。⁽¹⁾ 碑の正面には、戦前の内閣総理大臣・若槻礼次郎の書による「永田権平翁民功碑」の文字が刻まれる。その裏は、権平翁の地域における功績を讃えた五百十余字が並ぶ。そこからは、権平翁が地域の政治に深く関わり、畜産・園芸・養蚕などの産業や教育の振興、土木事業の展開に貢献したことがうかがえる。造立は昭和二（一九二七）年十一月。⁽²⁾ 『太宰府市史民俗調査報告書』（以下『民俗調査報告書』）によると、碑は福岡南バイパス建設の際現在地に移転されたとしく、造立当初は「字野口の道路に沿って立てられていた」。⁽³⁾

永田権平翁民功碑（以下、「権平翁碑」と呼ぶ）については『民俗調査報告書』にその存在が取り上げられているものの、その碑文は「剥落等があるので」内容の要約を紹介するのみに止められていた。⁽⁴⁾ そこで昨年十一月初旬、拓友会に採拓をお願いして、裏面の碑文を中心に権平翁碑の調査を行った。⁽⁵⁾

一 碑文について

拓友会の拓本をもとに作成した碑文は次の通りである（文字はなるべく原本のままとした。□は判読不能）。

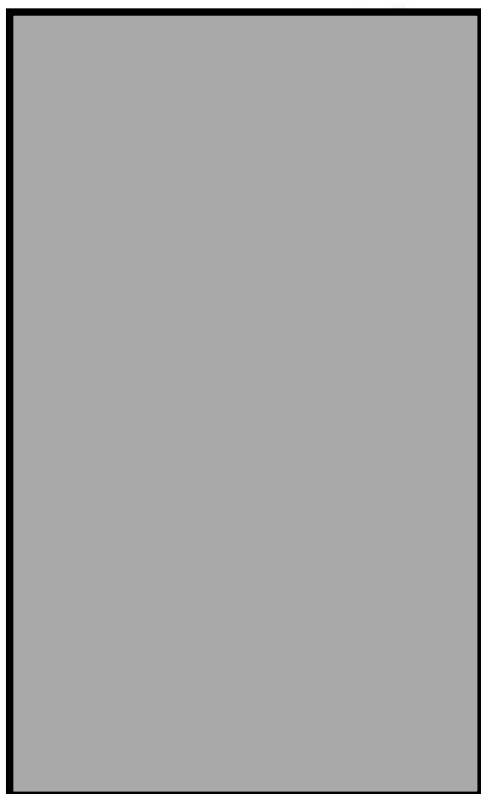
〔碑文翻刻〕

永田権平君ハ故権市翁ノ二男也安政三年二月水城村ニ生ル資性豪毅ニシテ穎悟ノ夙ニ組長ニ舉ケラレ戸長役場聯合會等ノ議員ヲ經テ區長村會議員タル事多年ノ二互リ推サレテ村助役ト為リ明治廿七年二月村長ニ進ミ重任シテ四十年四月ニ至ル此間二十七八年及三十七八年ノ戰役アリ功ヲ以テ賞杯ヲ賜ハリ又勲七等ニ叙シ青色桐葉章並金若干ヲ賜フ次テ郡產馬畜産組合ヲ組織シ家畜市場開設ノ如クモ亦君ニ負フ所多ク君ガ飼育セシ牝馬ハ久留米大本營ニ於テ明治大帝特ニ天ノ覽ノ榮ヲ賜フ尚ホ園藝養蚕等常ニ範ヲ示シテ一郷ノ嚮フ所ヲ知ラシメハケ町村ノ學校組合ノ組織水城尋常高等小學校設立ノ如キモ君ノ力其多キニ居ル明治四十ノ年十月筑紫郡會議員ニ舉ケラレ參事會員ニ當選シ四十年九月福岡縣會議員ト為ル而シテ村長在職中土木取扱法ヲ制定シ退職後尚ホ銳意斯事ニ當リ道路河川ノ改修灌漑水路開鑿溜池ノ増設等着々其効ヲ奏シ村民齊シク惠澤ニ資セリ昭和二ノ年三月大塚縣知事ハ熱心指導獎勵ニ努メ地方産業ノ發達ニ貢獻セルヲ嘉シ優賞ノヲ授與シテ其功績ヲ表彰セラル蓋シ家門ノ誉ニシテ又郷党ノ誇ト□フベシ茲ニノ同志相諮リテ其功慶ノ一端ヲ勵セントスルモノ聊カ謝恩ノ意ヲ表シ併セテ後世ノ子弟ノ能ク之ニ倣ハン事ヲ欲シテ也

水城區惣代水城區長花田鶴吉⁽⁶⁾

二 権平翁について

碑文には、権平翁が地域行政の中で要職を務め、詳細は不明だが村長在職中、日清日露戦争に關して貢献があり叙勲を受けたこと、また畜産・園芸・養蚕の發展に寄与し、特に畜産については権平翁の飼育



永田権平翁民功碑

した馬が天覧に与るまでになったことが記されている。さらに水城尋常高等小学校の設立や村内のインフラ整備に対しても尽力し、昭和二年三月、「熱心指導奨励ニ努メ地方産業ノ発達ニ貢献セルヲ嘉シ」て県知事から表彰され、それを契機に建碑に至ったことがわかる。

権平翁の経歴については、「明治三十二年一月改水城村役場職員録」（以下、職員録）と「大正五年吏員名簿」により明治二十二年四月の市制町村制施行以降を追うことができる。権平翁はこの時一級村会議員に選ばれ、同二十六年三月から同二十八年二月まで水城村助役を、翌三月から明治四十年四月まで村長を務めた（碑文では二十七年二月に村長になったとされている）。後、同四十年九月から大正四年九月まで郡会議員を、重ねて明治四十四年九月には筑紫郡から県会議員に当選、大正四年八月まで同職を努めた（碑文では四十年に県議とされているが、その時の筑紫郡当選者は川邊精五郎と森住一直であった¹⁹）。また「職員録」によると、大正三年に水城村学務委員に選ばれていたことがわかる（詳しい期間は不明）。

むすびにかえて

権平翁がその設立に尽力したという水城尋常高等小学校は、昭和十年代に入り「郷土教育」の研究・実践を企図する²⁰。そのプランを示した『我校の郷土教育』では、第三章「我校の郷土教育の実際」第一節「各教科の郷土教育」の「修身訓練」の項目中「郷土の偉人節婦孝子」に功労者として権平翁の名を第一番目に挙げている。現在のところ、水城の郷土教育において権平翁がどのように取り上げられたのか定かではないが、翁の功績を伝える「永田権平翁民功碑」は格好の教材だったのではあるまいか。もしかしたら当時、学童たちが教師に連れられて権平翁碑を囲み、難しい碑文を懸命に読むことがあったのかもしれない²¹。

註

- (1) 水城二丁目、永田家敷地内。
- (2) 大正十五（一九二六）年一月、第一次若槻内閣組閣。翌昭和二年四月総辞職。昭和六（一九三一）年四月、第二次若槻内閣組閣。同年十二月総辞職。
- (3) 碑の右側面には造立年月日（昭和二年十一月吉日）と石工名がある。石工名については摩耗がはげしく読み取れない部分があるが、「福岡市鍛冶町／石工 廣田徳右衛門／」「／石工 白水」「」とある（「」は摩耗した部分）。
- (4) 太宰府市史編集委員会編『太宰府市史民俗調査報告書（一） 太宰府の民俗（第一集）——水城・国分・坂本——』（太宰府市、一九九〇年）、六一―六二頁。碑を移転した際、新しく花崗岩の基台が作られ（高さ一五〇センチ）、その上に元の基台（自然石・高さ五五センチ）と碑（自然石・高さ二八五センチ）が載せられた。新しい基台の裏には建設委員として西山政吉・菊地善七・花田繁吉・花田岩吉・伊藤卯之吉・永田善一郎・花田亀吉・伊藤亀次郎・西山三郎・伊藤作五郎の十人の名が刻まれている。

(5) 同右。

(6) 一九九八年五月結成の市民有志による会。太宰府市文化ふれあい館の「拓本講座」が契機となり、結成以来市内各所で採拓活動を続ける（太宰府市文化ふれあい館編『太宰府市文化ふれあい館開館十周年記念特別展 拓本でたどる保存の心』太宰府市文化スポーツ振興財団、二〇〇六年、三頁）。

(7) 二〇〇九年十一月五日採拓。拓本は太宰府市文化ふれあい館所蔵。

(8) 権市翁については、明治十七（一八八四）年十一月八日の福岡日日新聞（以下「福日」）に「農業出精」という見出しで次のように紹介されている（漢字は常用漢字に改めた。また説点を付した）。

御笠郡水城村農永田権平（六十年位）ハ同村近傍にて豪農と称せらるゝ人物なるが、多家族なれど一家和睦し倅権市（三十五年位）と共に農業に志篤く、若し農業上に於て發明する等の事あれば躬行の後懇々他人にも説き勧め頗る篤志の人なるに、付近村に至る迄好評を伝ふるに至り農民の模範とも致すべき一家なりと近村老人の噂なり

ここで「権平（六十年位）」とあるのは権市の誤りと思われる。権平翁は当時満二十八歳であり、「倅権市（三十五年位）」が果たして権平翁を指すのかは不明であるが、村では篤農家として知られた親子だったことがうかがえる。

(9) 一八五六年。

(10) 一八九四年。

(11) 明治二十七八年の戦役は日清戦争を、明治三十七八年の戦役は日露戦争をさす。

(12) 明治四十四（一九一）年十一月の特別大演習において。大本営は県立中学明善校におかれた（久留米市史編さん委員会編『久留米市史』第三巻、久留米市、一九八五年、四二一―四二三頁）。

(13) 大野村外七か村学校組合をさす。明治十九（一八八六）年十月、御笠高等小学校（二日市町）設置のため設立される。同校は明治三十二（一八九九）年に御笠南高等小学校（山口村針摺）と御笠北高等小学校（水城村坂本）に分かれた。大正二（一九一三）年三月に両校は廃止、翌四月に太宰府尋常小学校・水城尋常小学校にそれぞれ高等小学校が併置され、学校組合は解散した（太宰府市史編集委員会編『太宰府市史 通史編Ⅲ』、太宰府市、二〇〇四年、三七八

頁。『太宰府市史 年表編』、太宰府市、二〇〇四年、三八四頁）。

(14) 大塚惟精。第二十三代福岡県知事。在任期間は大正十五（一九二六）年十月（昭和二（一九二七）年五月（西日本新聞社福岡県百科事典刊行本部編『福岡県百科事典』下巻、西日本新聞社、一九八二年、一一三四頁）。

(15) 区は明治二十二（一八八九）年の町村合併の際、旧村が大字として再編され、区として町村の下に位置づけられた。水城村は観世音寺・坂本・通古賀・片野・国分・水城・大佐野・向佐野・吉松の九つの村が合併し、それぞれ区長が置かれた（前掲『太宰府市史 通史編Ⅲ』、一二五、一三五頁）。

(16) 花田鶴吉は大正十一（一九二二）年十二月から昭和四（一九二九）年三月の間水城區長を務めた他、水城村村会議員・水城村助役等を務める（『大正五年吏員名簿』）。

(17) 太宰府市行政文書。

(18) 非政友会系（福日では「国民派」と表記）。筑紫郡からは他に原久吉（政友会）が当選（『福日』九月二十四日）。

(19) 前掲『太宰府市史 年表編』、三七八頁、三八一頁。前掲『福岡県百科事典』下巻、一一四四頁。

(20) 水城尋常高等小学校の郷土教育については、福岡寛之「戦前期における旧水城村の文化財保存行政の展開」四四〇―四四二頁（『古都太宰府』の展開 太宰府市史 通史編別編、太宰府市、二〇〇四年、第五章第一節）が詳しい。

(21) 水城村尋常高等小学校「我々の郷土教育」、三〇頁。

(22) 「我々の郷土教育」では、権平翁については高等科第二学年で学習する計画が立てられている（同右、三六頁）。

〔付記〕 本稿の作成にあたり、権平翁のご子孫である永田辰男氏には碑の調査をご快諾いただいた。また採拓については、拓友会顧問である小西信二氏はじめ、藤田百合子氏・村山悠子氏・關久江氏にご協力いただいた。基台まで含むと五メートルにもなる碑を、簡易な足場を組みながら手際よく採拓される様子は、ただ拝見して感服するばかりであった。末尾ながら感謝の意を表したい。

（ふじた・まさこ） 太宰府市市史資料室嘱託